国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫
函架 二七七
冊数 三
類 和書
番号 二七七四

内閣文庫
番号 和 27714
冊数 3 (3)
函号 177 1090

和書門
二七七四 函号
三 冊数 類

月影の谷、鎌倉志六に、月影谷、極楽寺ノ地内、西ノ方ナリ云、海鏡抹田産四に、月影ノ谷、極楽寺の境内ナリ云、名所方角抄相模国分に、谷の字とやつ〳〵ろ云、倭訓栞也部に、谷ハやつの略、蜂谷、蜂谷などこれ〳〵斜谷の時はやとゝ云、音のごとく いへるハあゝと云、師説に、やハ屋、静谷、壓谷、など穴居の所の名、後ろうとくぼまぬ洞穴をもいハやといひ、又村ゝて谷ともやとゝいふ、浦もじと係てやつといふ、谷門の義なり、武蔵ね抹の俗言にヤトともつをを忍べし、谷ノ戸をヤツともヤトともいふ、やゞて谷のうもいひうつせり、俗言なり、

山寺の傍、　極楽寺〳〵鎌倉志六に、極楽寺ハ霊山山ト号ス、真言律三ノ南都叡尊寺ノ末寺也、開山ハ忍性菩薩、良観上人ト号ス云、此寺昔ハ四十九院アリシト、今吉祥院ト云ノミアリ、寺領九貫五百文アリ云、東遊行叢抄十六下に、極楽寺吳山ト号ス云、稲村崎ヨリ北也云、海鏡、猿田産五ヨモ云、五重塔五十に、弘長二

吾嬬住所谷浦近荒下山寺傍恨不断信何時待遠問行逢便伝言附伊字二字先

あづまぢにすむところは月影の
谷やはるゝぞいとちかうらの
さゝ山もとまでかゝりけるとぞ。
山寺の傍
ものゝふのとゝでて。ちみの
国の諸本但ち風、今据扶桑拾葉、
ぬ松の風
松の風
このれば
待ばつゝの
伊仏
うはの山まで行き河ひ逢
ゆきまぢ山しの
ふことばけまし伊字二字先

年十月三日、陸奥守平朝臣重時卒、自往
年、年六十四、于時住極楽寺、別業云々、帝
王編年記廿七年、永仁六年、戌戌四月十日、西来
招提寺、大安寺以下三十余ケ寺、為関東祈
軍家御祈禱所、停止寺領之遠記、禁遏殺
生之重罪云々、極楽寺相模国鎌倉郡云々、
沙石集五下、鎌倉ノ極楽寺ニアル僧夢
ニ見ル、文殊連衆シタル付ヨトテスヽ、元亨
釋書十三、釋忍性姓伴氏、和州磯城嶋人
也云々、弘長之始、相陽止清涼寺云々、武州
刺史平長時、欽性律行、新極楽寺延之
性後号云々、初正嘉中有沙門、宣一宇安
文大、弥陀像、名曰極楽寺、未落而亡、武州
之父重時、遷其宇于今地、為爾場、至武武
州与其弟業時、戮力修造、成宣剃云々、
いつ〳〵、何時歟、〱〱ハ助辞、続紀卅大、
宣命ニ、伊都之可病止豆云々、万三ニ、何時
鳴此夜乃将明跡云々、何時然跡待年
妹乎云々、

おばつるたれぼどわしも、保氏帰本ニ、
はいとのよおばつるたくうめ〳〵おど
したれどうく、宣長がおれ小御ニ、ナズ、てお

たり〳〵人力清許とよ。正
ぬしかなるたぐりあり附
ろて。在昔ゆり〳〵ゆ返覚〳〵ゆ紀
ばしくて。

旅
きびゝ衣間をそへそうつの
山ぢぐりぬひ間ぢさぐるん。
不時雨
不意
やくるをたくあくぐ停宮ると出ぐ十い
大夜
さひの月やれくれぬ不後やく形見れ
るべて。扨と出ぐ〳〵ことは神
無月十六日なり〳〵かど。
いさよ月をれば〳〵

ばつるたく、又心のとたくなどゝ言ハ、
行をとる心よおばくいろ云々、ちゝ〳〵れ
の便のまちどをたる間をいろ、万八ニ、水
ゐれ時のねられ葵山れ杜保末無毛おも
はゆるかも、同十ニ、このよひの於保末無荷は
さぐぐひたくたるこ忘れれくのさるひさこ
れ〳〵れぐ〳〵と同じくて、樹恒ケど
の字義ニかゝ〳〵、

山杜のたりにことづけ〳〵〳〵たり〳〵、
ぬ一の巻ニみる、ことづけハ訐附、その事
をれはとゝ附てやるとゝ〳〵ことづても言傳ニ、保
氏帰本ニ、それ本のことにことづてゝ〳〵ま
つたえにゝ〳〵ゝるも、託言〳〵てゝ中たえたるいろ
遣之いろにつげ知ら、こハ訐と告やれるにて出たぐ
あろ〳〵れかへ〳〵、ありゝ〳〵とハさきニ出ぐ〳〵
物ぐかたゝ〳〵き、ぬ〳〵ぬのトにかゝ〳〵〳〵とれはみあゝ〳〵ニ出さる者のかげかゝ、ぬの物ニ出ぐ〳〵、
かゝみ、万二ニ、吾王乃形見何此馬云々、同四ニ、余衣形見ニ奉云々、ま〳〵吾妹児乃形見乃服云々、ぬ物れはり、
同十六ニ、寄物陳云可多美ニ、みえ遊仙窟抄五ニハ行カタミ云々、記念カタミ云々、ケど訓たり、人の形をみるぐど
〳〵きたゝ〳〵ケり、

かみな月、和歌童蒙抄二ニ、十月、コノ月ヨロヅノ神タチ出雲国ヘオハシテスミヨリテ神無月トイフ云々、奥儀
抄上末ニ、十月、天下れもろ〳〵の神出雲国ニ行ケさが也ゐ、ぬ〳〵ケ一月ニ、ぬ〳〵ケ一月ニ、ぬ〳〵ケ一月ニ

国ニハ神アリ月トモジンザイ月トモ申也、我朝ノ諸神参り集玉フ故也、其神在月ノ浦ニ神〻来臨ノ時ハ少童ノツクレル如キ九籠舟、船ノ上ニ俗コト不可及竿数、諸神ハ神在ノ社ニ集リ玉ヒテ大社ヘハ桑玉ハズト申、彼神在ノ社ハ不老山ト云所ニ主玉フ神号ヲハ佐太明神ト申シ云〻、徒然草ニ十月ト称世月ト云テ、神ノ少ナクマシマスベキヨシハ、ソレ文ニモミエド、但高月依社ノ条ニ見タリ、

又世名ヲツケル世月ヲ称ス神無月ト云ハ、ソレ依社ノ条ニ云〻ハ、伊勢ニハ二月ト云ヒ、ソレ依社ノ条ニ見タリ、十月依社ノ約束ノ例モ有ハ〻、但シ外ニハ不在ノ例ニ、云〻、奥傳抄ニ、神去月、神世月、十月、物忌月、物忌月ト云ヒ、又神ナシ月ト云〻、又神ナシ月ト云ヒ、蔵抄ノ上ニ、十月神世月ト云〻、又神ナシ月ト云〻、藻塩草時節部ニ、神世月、出雲国ニハ鎮祭月ト云ヒ、又神ナシ月ト云〻、語意考ニ、十月ハ陰月ニテ雷ノナリ絶ベキヲ、ソレ故ニ、年山死角ニ云ヒ、九月ニ云〻、霹靂ヲ云フ、ソレガ十月ハ純陰ノ月ナレバ雷ノ云ヒ絶ヲ云ヒ、ナリヲ云ベキヨシ云〻、小車抄ニ、十月神常月ト云〻、萩原随筆ニ云ヒ、カミナ月ハ無上月ト書クベシ、数ノ上ナキ心ニ云〻、倭訓栞加部下ニ、かみなづき十月ト云ヒ、十八数ノ極ナレバ、数皆月ノ義ト云ヒ、神嘗月ノ義ト云ヒ、類聚名物考時令部ニ、侍革長烏帽子、山陰雑筆ニ、ケダモノ、万ハヨヤミ、ヨヤミ、ヨヤミ、

せうと、兄人の義、伊勢よみせうと堀川の殿ゝ云、古今序古注よせうとの説云、その分明なる歌、女八兄をも弟をもせうとくいへり、女八男を指て妹といひ、男八女を指て妹とも云ふ、いもうとの名ハ、いもうとも妹人の義なり、兄人よりせうとなる条、

為兼の卿、公卿補任に、故従二位為教卿男、母故修理大夫三善雅衡朝臣女、建長八年正月七日叙爵云々、延慶三年十二月廿八日任権大納言云々、正和二年十月十日出家、依上皇御出家也、法名蓮覚、後改静覚云々、

為兼の卿、　拾玉集、七月の七首

のゝゝゝとけがさしゝとぞゝゝくのかりひ
きりけり、潰後拾遺恋、定家卿、
おちしほの水茎こゝろ〳〵ぞゝゝ
れいろ〳〵みえねバ、

式乾門院のゝくしげどの、女院小傳に、式乾門院利子、四條准母後高倉第一女母北白川院、嘉禄二年廿六為内親王、廿八同日伊勢齋宮、天福元二五退下、卅七、六廿為皇

文に。

遥思遣やれ
たび衣たゝみぞ恋ぬ
旧
ゝゝ向
ゝゝ返
諸本他返今据伊金図ふ。

おもひやれ露も時雨もひろ
にて山路ゝ今来ゝ神のぞゝゝを。
兄為兼
これせうとのたゝかあれゝゝみも。
わなゝゝさまゝおばつゝなゝ
群他くゝ
なゝゝゝゝ。

古今ハ時雨ゝ立ゝ猿たび衣
雪にやゝゝゝ寒ゝゝゝゝゝん。

后宮、依准母也、延慶元十一十二為尼、依病也、四十三、真性智、同日院号建長三正二御事、五十五云々、女院記に、式乾門院利子、後高倉院御女母北白河院中納言基家卿女也、四条院准母儀、建久八年誕生、嘉禄二年十月廿六日内親王下宣、齋王、同三年四月廿二日入諸司、左近度、同年九月廿一日入野宮、安貞二年九月十九日参神祭、寛喜元年四月二日准三宮、年卅三、天福元年二月五日伊勢ヨリ入、同年六月廿日皇后准母后、文暦元年十一月十二式乾門院ト申、同日為尼、ヤ〻ヒニヨリテナリ、年四十三、法名真性智、建長二年月日御事アリ、五十五云々、ほくゝ〜げ後ハ格芳抄中、末に御簡匂殿在自観殿中以上鶴女房為別当有、女蔵人云々、禁秘抄に御亘殿別当是ハ非女御更衣之儀、只御所中沙汰人也、上古、天絶有之、内蔵寮外、御服ナド裁縫所也、後冷泉院御時、頼宗公女候、其後絶、無其人云々、西宮記、江次第ナドにも御簡匂殿の〻〻〻

光公、尊卑分脈ニハ、土御門内大臣通親
公子母藤範兼卿女、宝治二年十七依病辞
職、同十八日薨、六十二歳、公卿補任、諸家傳補任、ナドニハ
續後撰、拾芥抄ニハ、續後撰廿卷、千三百六十八首、
依後嵯峨院宣、式部卿為家卿奏之、運歩色葉集、志部ニハ、續後撰集后深草院、建長三年辛亥被撰
之、撮壌集下ニハ、續後撰廿卷、
家々の折閑、慕歸傳記五ニハ、正和四ノトシ閑窓集トイフ折閑ヲスルニ、徽書記物語ニハ、視葉集ハ
折ヲヒラケル、ナドヽ折ヲヒラケテ、そばくろのうたとあつまれるをとぶらひ、云々、清輔集ニハ、後成入名
うち、ぶくやうろうとさして、我々のこのいりぬるずこかすりをこそ、等ぬ、云々、
安嘉門院、　女院小傳ニハ、安嘉門院、邦子、後堀河准母、後高倉第二女、母、中納言基家女北白河院、兼子三
十一廿五為内親王、十三、同十二、為皇后、帝同胞姉、依准母也、貞應三八四院号、十六、文暦二五十四為尼、正如覚、二十
七、弘安六九四御事、七十六、女院紀ニハ、安嘉門院、邦子、後高倉院御女、第二母、北白河院、中納言基家卿女、後
堀河院准母儀、兼元三年誕生、兼久三年十一月廿五日内親王、十三、同年十二月一日皇后宮、年十三、此日天皇即位、准母儀、
元仁元年八月四日安嘉門院ト申、文暦二年五月十四日為尼、年廿七、法名正如覚、弘安六年九月四日御事アリ、年
七十五云々、
まかりまゝ、　神代紀上ニハ、就マカル云々、去マカル云々、就去マカリナントヽ云々、永退ヒタブルニマカリナ
ン云々、臨死マカルニ大ヨンデ云々、同下ニハ、死人マカルヒト云々、ナド列ノ、和訓集ニハ、同離ノ義トイフ、万三ニハ、今
者待厳云々、同五ニハ、麻加利伊麻勢云々、方ナド名、眼兵衛の佐ニハ必退出れとよのゝいふ、いまれたく、師説ニハ、
まかりを退出の義とけをもとろかくりーゝどもり、同離の義ニて、別々ニしてこれをいひ、そして別れて退くこと、折り
ていかやすいの例よりも別たり、後撰春下ニハ、琴弾ナドしてあそびのゝりなどしけりけるかどよ、後
ふけよりけれどまかりとまりてこそ、同雜一ニハ、四位ニハ必まかりなるべきりけるを云々、拾遺春ニハ、
まかりまくれて、けりけるころ云々、同別ニハ、伊勢ニハ、れがりけりけるこゝろ、花のびてあいひけりける女れあづまへ
くだりけるぶあ、坂をまかりあひて、けりけるよ云々、同哀一ニハ、源公忠朝臣ニハ、日々にまかりあひけりけるを云々、
竹取物語ニハ、舟を漕ぎまかりいりぬべく吹きまかりて云々、空穂後撰上ニハ、まかりてづくる云々、これらをみる
敬ひくんれ泊とせりといふれたり、まかりまくれ、神代紀下ニハ、辞マカリマヲシ、古今離別ニハ、
人れ者よやどりてあるつまびらかにそまうりまくれけれバなどみる、
北白川院の、　安嘉門院ノ生母ニ、
草の枕、　旅宿ニハ草ヲ引ひすびて枕とするを、万五ニハ、道乃久麻尾ニ、久佐太遠利志婆刀利志提、ナドヨリ
ろうてまりしべ、方一ニハ、草枕客ニ之有者ト、よめるかたびとの、旅宿ニ、
年さへもくれぬる、　旅ニハ年ノくれをもとろふ、
志ろて、　語意考ニハ、十二月ヲ志波須ト
いハ登志彼都留月の上下ヲ略ス、彼ハ物のど
一都ト須ヲ通ハシいフ、万八ニハ、十二月ヲ者
云々、仁德紀六十二年ニハ、冬冬シハスキ、

安嘉門院方
あんかもんゐんにぱかくとて
侍
さぶらひたまへ。なづまぢれ
吾妻路
りひえ〜ぬ日にて。まかり
まゝ〜れよ〜ふ。群北白ほ
奈
どのへまゐりー。かど。ええ
させたまぶりー。かどこそ
ひだりれいで二字伊无
出
たちもの
立物

さとがくて。かくとだよきこ（騒）（斯）
えあへぬいそだいでしにも。（不敢）（急）（出）
伊仏いてしも岡仏のてみしも、ところにかりて。
伊仏かりたまひて、群仏かりたまひ、（音）（信）おとづれきこゆ。
その松たがく年さへ（群有る字）（雪）
くれぬるこころぼそさ。ものの
ひまもなきなど。（間）（无）（二字伊无書集）
えて。（俯）（遷）
ねえくりながもろこえを
かさ、（瞎）くれてほどい雲ぞ
にぬゆく。（二字伊仏）などきこえ

たりしを。立かへりその法師す
さよりあるべきこころ（伊群共有る字）かけ
まゐせたるとけい（金扶共无）ものを
ものをすこうるふこまちえてめ（孫）
づらしくうれしさ。すづな（嬉）
よごもこまかにまうし（巨）（細）（申）
たくさづみよ。ちちはいい法（候）
云たがへのけ幸ぬ法うへ（ぎゃう）（かう）
とて。まだ（混）（二字伊无）ほどみて。
ねりぶだかりもいぐとかい（如何）（本意）
たうこそ。法たびあしとと（无）（旅）（明日）

ゐ方たぐへ、三代実録巻十五、貞観七年
八月廿一日己巳、天皇遷自東宮御大政官曹司
廬、為来十二月将遷御内裏也、當此之時
陰陽寮言、天皇御本命庚午、是年御絶
命在乾従東宮指内裏、直乾故避之焉矣
和物語よりかのつぎのつぎのつぎ
ぬ方たがへるのつぎのつぎのつぎ
て、保氏帰本ものよりかのつぎ
りはまがりて行りつぎのつぎ
づくれるたぐへいとなやまし

れはいのごとくなれども、いとあしきことなりとて、これをかれたるこたびはあまりあるべけれど、ひさしくなりぬれどそのまゝにてなりぬれば、かくてはあるまじきことなりとて、かくてひきたがへられきとへてとおがさんハいとをしたなるべしとて、河海抄ハ中神也、或長神、天一神也、金槫經ニ曰天一ハ中央為十二時之吉凶者、ハ中央之故号中神、故件方古今所違来也云、潮月抄ハ天一神ハ地星の精也、中央ハ土ゆゑ名ハ中神と号す、四方ハ五日づゝ巡行と、かやうに日をもて移てゆくあるゆゑ長神ともいへり、式神のあがりとふさがりとハ、このゆゑハ方違あること之癸巳より天上して十六日ありて、式図と天一天上といひて、八方へ四ときそもさるなるとなり、云々、金葉集云、下ハさいこのけハ、ハ、ハ、

たび云たつ日と、新古離別ゝ記ゝ
わかしものと接ぐろもたつ日とゝ
たりにけるか、

ひとゝよ神やめをやー
たび云たつ日をきゝあうゝみ（恨）
たりせバ。さてもそゝとたり言
にありゆくとれゝ（推）さかり（量）
の六字、伊、因、共伊ゝ一二字、ハ返すい。
かたくゝ一言ふ言は（打）（暗）
たゞめもはどはくるのあ（長）（見）
りまたそゝる。とあれバ。これ（知）
びハ又。たつ日を扶伊（も）ゝ
とあるハ返ゝ伊返す（伊）ばかりとそ
きこゆる。

ふかゝたよゝうゝむゝんたび（何）（限）
ごろもたつ日をだもたび新（ハ）
ふて。」あつたたりあゝきゝ（曉）（便）
て。よも二字、伊夜伊夜、（終）（起）（居）（都）
やこの文どもかゝ中ゝ。（書）（殊）
へだてたゝ（隔）（无）（隣）（憑）（交）
ゝたるあね（姉）ぎ。とゝ
ひとゝゝすさまゝゝふ（烈）
はど。きいの宿ゝ
こゆれど。たゞいまあるまゝ（唯）（今）（在）（様）
ゝとを伊伊（事）（と）ぞかたは伊、金、共伊伊（書）

れ〳〵しの左上、女よれ〳〵〳〵〳〵いつす
古事記上ニ、其弟木花之佐久夜毘賣
ヲ〳〵、古今雜上河ヲ、あれ〳〵〳〵〳〵
ゆりひろ人ニ云〳〵、源氏花宴ニ、朧月夜の
君といつるあふ女所の所れ〳〵〳〵〳〵たちに
〳〵あ〳〵めを〳〵、續世継くりあれ巻ニ国母
も后もあれれ〳〵〳〵〳〵よれり〳〵ばを〳〵、
後拾遺恋一、紫式部日記、水鏡上、ゆど物
よおを〳〵〳〵〳〵〳〵、挙ニいく〳〵ま〳〵〳〵、
〳〵〳〵物、強ってと〳〵〳〵物とゆ〳〵ていつる之、
古今大歌所ニ、てゆ〳〵ゆの強〳〵〳〵〳〵
〳〵〳〵〳〵〳〵ひめざ〳〵めすみ仲ニをれを〳〵、
牧草子春曙抄四ニめを一すゆ〳〵り紙ニ〳〵
みてやりつ〳〵、又〳〵ろ〳〵るめ〳〵〳〵〳〵を
つ〳〵みてたまへ〳〵〳〵かゆ〳〵、ゆ〳〵ゆみえ、
伊物ニハひゆ〳〵ゆりの〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵み
ゆ、
ゆ〳〵〳〵〳〵やく、万三、ゆ〳〵ゆ〳〵ものゆ〳〵
ゆ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵

とやろぶごくといつるこゝろく、万葉類林五よ、たまづさの使とハ、使ハ玉づさを及ばせたれバかくづけり、人とづくるも使こ妹とハ玉づさハいづれもそうていつぐ、ゆゑ男女の間よりかゝすとせんとおもふもよろバ玉づさをかよそす妹といふよや、君が使とハ男女よりさうてよむべしこゝ、万葉考二よ、玉ハほむ句、律ハ助辞佐ハ章の字音よりこゝ、師説よ、玉梓ハ玉豆志の豆ゐこ字鏡艸部よ、惠苡子玉豆志、苡ハ玉豆志、ケぐみえ、古語拾遺よハ古語以惠曰都須とあり、本草和名、和名抄ゆぐよハ、都之太末とあり、今孔世ゆゆズダマとゆゆ、その実一ひ〳〵の間そなるがゆゆ玉豆志の附合とつづけり、妹もおし

たゞむかとつづけしこゝ、さそやぐそ使のすゑ、又使ハ文りてゆゆ玉れバ文のすゑもゆゆ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ

もいてり、物月之、
宿のまくら、假の寄るよ、哀くさかけて
よりり、古今哀二、侍の文花者よりるあみ
よるさくや哀の外ひぐくめよぐくん、
そくよ外とる紀、其処とよ外も定たる
てくよ紀うの図、高光集よ、秋世月風
まお聚のちくくさはくくくくくくくくくのそ
かるし紀、小馬命婦集よくくくくくくくくし
てくくさくくくくくくのくのさひげよあるあけ
さぐ哀しくよ、空穂嵯峨院よくくくくくくく
くくくあはたぐしくよ、源氏帚木よくくくく
外くくくくけし紀ばのろくく、外くかものよ哀
し、新万下よいづこ葬処とろくのよひこん、
とあるも同侍之、ハカハ後処の墓詣処を加
とりふハ往処隱処などに同し、

げたるくあれど。倒いたくと
ろどころへは文かく中に。
伊有も字いさよ月とおくづる
たまくくくくくくくくく

なほ久、紀伊名所圖會五よくへ、
とびれ貝、万一よ、大ぜの浮洲のもとに
る忘貝、東なる妹とゝもとれてりへや、同七
よ、いとまゝ、べひろひよゆゝ行のえの
岩よりゝ人、忘貝、代匠記よ、チヒサキ
貝ヲ拾ヒテ、ウキヲ忘ル、ト云心ニテ名ヅ
クト見エタリ、一種ト不可見え、和訓栞
よ、淡岐国松が浦よ忘貝ゝて、玲瓏の
役形かゝ、如なる名産ゝすゝ八、紫德
院播迁ーたまひ、付松原のまつが浦
風吹よせべひろひてーのべ忘ゝすれ貝ガ
涙ーたまひーうゝ、按よ、この紫德院
の御歌ゝ八、後拾遺、別の定頼ゝ、但上の
句、松山の松の浦風ゝ、藤原顕綱集よ
ゝ、いろなる貝のちひさ見をこれな
んゝ忘れ貝ゝ八、まことゝ、人をうらなり
ゝて人の見せけれべ、これやさハくゝ忘れ貝
おぼつかなくゝ、ゝ、ゝ、

うつせ貝、実のなきをこそしさ貝なり、
百十二、伊吉はさまふうつ貝
こなきをこそしてこれこひやも、

それぬ心、拾五、巻すこやもみこそ
たくゆぎてのそれぬるろをくしら
らやや、

くちしてなどあり（二字、群、古、共仙とへ、）
れむぞよ（潮）ろひにひろふ（于拾）
空
うつを見ゆひはる法のなりへる
世成。
比
くべみよ裏はうちは事
は自はれぬるろはれたぐな
ぐめを。
同様
法のなもひろにちふ
花を原作れ れのひるくれも
ぐはたろ。
東海のさくをみくを

まもなくしをさ、古事記神武は条に、
手足和那（ハキ）て波豆（キテ）そ、神功紀に、戦（ヲヂヲク）て栗
（ケリ）敏達紀は揺震（ウナキフルフ）皇極紀は動（ウナキ）又掉（ヲヂ）
戦（ヲヂ）などみえ字鏡は慄動也、赤惶也、和
奈（ナ）ゝ久き、そのうつはなくといふこと
波文（ハモン）などはなくなり、
ゝ八やみ、和名抄病類部に、説文云、瘧
寒熱並作二日一発之病也、俗云衣夜美、
一云和良波夜美云、源氏若紫に、ゝ
やみはなぐひひてゝ、榊末摘花は末
ちぐよもみる、

おごり、万葉四は、狂（ハヤ）ぶ法ひの名（ナゴリ）疑云、
文選江賦は、論餘波（ナゴリ）予紫末業、後賢は餘波
拙湧云、長恨歌は餘波云、源氏は若紫に、
して法ひのちくそなるあるもあるものど

まびまびはみやこは花を人（都）
やとそもも」やひはもを（弥生）
つ（雅）ゝ（病）ゝ（瘧）ゝ（古）ゝ（他）ゝ（交）ゝ（発）
ゝにや。日まぜに（病）ゝ二
たびはなりぬ。（可怪）はや（憔悴）ゝ（暁）
なるゝちしちぐ。三たぐに
なるべ（暁）はるさはりはさぬ
て。仏の（御前）はまへにそ。を一ゝ
ゝ。ほく（法華経）ゝ（其）ゝをみつ
は（験）ゝにや（名残）ゝ（落）
はちなる。（時）なりしを都の

り狩よりとりあつまりたるとぞ。たぐひなくぞ。
で、後世のものとのみおもふるまでもう
つくらるる。

たりけれども、此有 ありがたくすこそたぐ
古人へもつげ告 遣るほいでに序 例 まい
の修古 尤 中納言 為教女 はいまをしたびた旅
けるまで。はやふ危 ぬるめこ心
ろぶるさも。さてが扶、古、共有に此法 ありがたし
かの出家しやうや。さまでハかけ倉 掛
ぐめてこそ。留 徒 海士
いづふあるは海士 ほ蟹 ほ海 を
たまはは誰 見可 ぬ。清なび。
とぞ。たりしを驚 ぬ。返
かへりごと事 早 くし給へり。

たへなるのり、新続古今釋教、俊成あ
き法さびし死山の中なれどこへなるのり
ハへどぐざりそ、
弁月、万十六ま四月与五月同ホ藥編三、
まき十九ま四月之五者ま、弁花のさ
月ぞれば、弁第月の美ン、

法を世ぐ世ま浦法ま年
をへて光を原化ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
のまるびし」御経のの験
いたたくて。貴
ものなる頼哉 方に隨 ぞ。
月ぶるたへなる妙法華の花ぞ
りは」初月ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
便
りぬれば。為教女 ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
へ。去年 春 夏 恋
ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
ぞ。ぞ。不変

[illegible]

[illegible]

[illegible]

せきのこゝろ、古今序一は、まねび山がつ安つかまつるのせきめこゝろとそ
ゝ、
やさし、長恨歌伝は、閑居ヤサシゲナリとよめり万葉五は、吉美乎夜佐之美(キミヲヤサシミ)云、又世間乎辛之等(ヨノナカヲクシトヤサシト)夜佐之等(ヤサシトオモ)思(ヒ)ども云、竹取物語、源氏は木枕、ちどふんぐ、やさしゝみえ
う、古今集誹諧に、伊とゝて方ひのぐづに
あめ〳〵とこの行りん〳〵ぐそやさし〳〵と、恥ろ
しさんすゝ閑居の義は用ゝう、
そのゝ、新撰字鏡イ部は、佛彷佛也或為髣髴、
保乃加尓云、万葉二は髣髴見之云、十は不明(オボロ)
云、
ひさのやつ、鎌倉志七は、妙本寺云、此地
ヲ比企谷ト云、比企判官能員方旧跡ナリ、今
按スルニ武列ニ比企郡ト云有、頼朝ノ乳母能
員カ姨母武列比企郡ヲ請所トシテ居ス、故ニ
比企尼一号ス、甥ノ能員ヲ猶子トシテ共ニ此
所ニ来居ス、故ニ比企谷ト云ナリ云々、比企の谷は、
忍岳八幡よりもたかく、
そもり。人づてにきけば。(比企谷)ひさのやつ
といふところにはまさこゝろなれけ
る。人こゝろ先どいふと(古化ども)
て。
さればゝ孫(原有ハ字)ハ元きけ高つ
ちゆ(何時)ゆる雲のはたりくいはゝ
おのゝん。(名告)などひとり形をへゝを
そけうひも(古も字元)好」(素)ものゝあ
づまぢハみちは形くまでむり
しまち。ゝゝこゝとまもゝちる(彿)
ゆゝひにやなりゝ。一ゝゝ(筋)

和徳門院、義子内親王とまゝ、九條廣幸、
姫宮、母順徳院女房右京大夫、女院記は文應
二年三月八日准三宮、同日院号、元内親王、弘安十
年十二月十日為尼四十、法名真如覚、正應二
年十二月七日御事有、五十六云、まゝ紀運
録中、女院小侍、ちどもみも捨不抄宮城部、
化徳門在東陵侍殿北、今亦無額、又云無名門
云、又無名門大内図云右青瑣門南也嘗殿
如此、往文之上以化徳門又可謂無名門、按若書
誤歟、云化徳門之無名門者所分明也依可混
乱哉云、ゝよ竹中抄抄に、化徳門のひつぐ
ひて云、ゝ鞠ゝ云、
孫宮、後鳥羽院皇女類聚大補任に建保年
懐子内親王御歳十三九月十四日主野宮、同十九日
著、

に又(不鳴者)ちゝばハ(可)ゝ。まれにも笑
人ゝゝけるこゝて人(別)ゝ
ゝ。心づくし(盡)にうゝめ(怨)しゝ」。
又くゝと(和徳)諸本化て、今据群本、く門院ハ彩中納
言ゝこゝのゝハ。京極の中納云
皇家(群、古、共二字元)ゝ
ゝ(前)ゝの歌ゝゝこゝゝ。
ちゝの中納云(進)まゝ(置)ゝ
ゝ(隨)ゝて(経)ゝふゝ。
此女院ハ歌宮れゝゝに(為奉)ゝて
古化ゝちゝて、ゝゝゝゝしかば。

ら見ることなくてもうる歌、続後撰表五ほど
りはふうきみこがくもりふねりそハゆき
のゆげだにとみどと、塩川百首折ふしもうる歌
はづしめ掘こころせよほそひやちぐ風ふ
ちとよる、

傳
はくりてさぐ候む絡ちり。
藻刈
うれみこがるくをうり舟ちど
ちくまくりし。民部卿典
侍
けかせうとにてぞおもしれ古化
可然
ける。きふ人のるよて何やし
音怪
紀寄ちて。人にハ古作ハ不被聞
蔵
まづとあかがちよりみ絡し
強
かど。遥旅
覚
れうちる学びれ折れ
東無
つうふさま。何よれ学れるども
元
とかれ絡ぐじて。
いうどりる歌おるもハ絡ふ
鶴

らん、夫木集雑九ふ、従二位教氏、ふとかりハ
ちくとまぐハどーなぐまのみーまぐれの松の
支つる、

かハぐり、白氏文集ふ等閑云ふ、千家詩の
住に尋常也とあり、遊仙窟ふ平生ともよめ
り、直有（ナホアリ）の義と和訓集にいつり、すもちな
くてあるよう〳〵、師説ふ、ちかハ常の義ふ、
かかハ人もちの人〳〵物の曲れるをちかハとと云
もちのさまにひるとちつり、まれバちぐもり
直去りて、平ちのまにて吋月のとちるよ
し〳〵といとれつり、
あ〳〵ぐ、鶴ハ芦間ふかりのるりのなれバ、
田鶴
行ぐぐとふつり、たづも田ふあるる白ふ
田鶴とハつり、ずーぐハ万葉四まふ大同
土の条ちどふあり、契沖ハ行げ馬とし
も、芦苑のしろきにふ〳〵名ぐそ折〳〵ろも
又白きよう〳〵とひ、八江昌嘉も道海集にハ

飛
はとびわれ別れちくもあちとびか
ちまふあくん。と文れ一とぐふ
でけて。ちのやうにもあびし
うれたち絡へるを。人ぐりは
不等閑
ふかぐりふ〳〵どおぶゆ。古有ハ字ハ
かへりぐ〳〵ハ。
飛
それかふにとびるれてを何芦
田鶴
しちぐかるる歌おりふかたも
群他
ちかぐかちふ絡し。ちさと
為家
西」。そのついぐぶ。故入道大納云
立
ちれまくるもたちちひて
係

に、そこらの行の芦のあしたのふしのようなるを
かくぞみかとあれど、指と花のいろのひと
ぢなりといふ、

夢ゆめにみえさせたまふようなど。
この人だうやあはれも思はざ
んとて、かたつけてたてまつる。
都までかへるも語まうはも
ひれしのぶひとれば夏の
ぶぐり紙。

もろかたや指れの夏ふま迷
らひきてさむれだみえぬ人の覺
はもらげ。などうさ古有つけ二字てる
てまぶうしく古仏を。又河なぐち強
にたりうづねてう返事へ
便尋

さむれバみえぬ、千載雜中よう紀とよの
まどろひぐハ、ひとれてさむれハ
ぶりくちてすれ、

たまうさ。さを出のび指つう
しも。をううたりう。
東海はそのまうハとう
れどかたれだちさいふ
へり夏。

何處いづくうり指祢の白うり群仏に通
かうんはりひはをつる夏を尋
ぶづて。などの指へう」夏つの
れどハかやし紀まで指づも信
たてて。はぶつうをも一かれ絶
らず。みやこけくハ出かへはく

志賀の浦、景行紀に、是志賀三歳云々古
事記成務の段に、志賀高穴穂宮云々、元亟

西行物語巻三所
載野中清水之圖

国立公文書館
National Archives of Japan

紀ハ志我依智二郡ニ、万一ハ、さ〻波の志
我能大和太ニ、ぬの万葉ニ分ル、
和名抄ハ近江国郡儀賀志賀ニ、
山三井寺のさま〻紀、　山ハ比叡ニ〻
て、いつく称ハ、上の巻にみる、帝王
編年記ハ弘安元年五月十三日巳時、日吉神輿
三基入洛、是依園城寺金堂供養也、十六日
吉神輿各皈坐ニ、

なみたち。山三井寺ハさま〻紀な
ど、ゆゑを、いと〻わかつなり」。
からうして八月二日ぞつかひまち
得。扶、群、共有て字　え日ごろより、おさたりけ
る、くけつ、ぞとり、ハつ見
てこはるか」侍従ハさいしやう
の群、六字无、　君ハ許ハ五十首
れ和歌、原、二字无、　ようたりけるし
て。清書　さようハもし為不敢下　あ、ぞく
れたる。諸伝ろ今据群ニ　ものし古有可愛と字　
し古伝とあ　くたりに群、伝まろう。又

てんあひ、吾妻鏡四十八ハ、武列申下供奉
人御點、被遣越後宗詩ニ、右御點、布衣左
長點、隨兵、短點、帯剱、同五十ハ、将軍家今
年中御詠歌、数巻之中抄出三百六十首、致
清書、是為合點、可被遣入道民部卿ニ、明
月記建久三年三月十日の条ハ、不可及合點云
ニ、節用集加部に合點ニ、運歩色葉集加
部ハ、合點ニ、下学集言辞門ハ、合點、言同
心之義也ニ、行宗集ハ、ものてんくはり
よりのあ、ばニ、又ぞ、ハくよりかくのてん
ちれば、ニ、袖中抄十二ハ、合點、てよ
るしニ、土御門院伊集ハ、ハ、の歌ハ、
歌、此中左右點片點難分申上ハ云ニ、耕雲
口伝ハ、信列中書ハ、にをり合點有、付
とニ、てんとあひ、ひて、ぞこまら
に去係、ひ、ハ、ニ、玉勝同十ハ、ハの
点ハ片点諸点ハ、ハ、ハ、ハ、
りのハ、ハ、持統紀ハ、點サダ、ハ、異
記ハ、點サス、ハ、
おこせて、万十八ハ、ハ、ハ、ハ、
をまひ、び、許世牟安麻彼ひ、ハ、
有ハ、同十九ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、

十首に十八首てんひ合點ぬる。
あやしく、ハれ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
こそあるめ。その中に。
ハれ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
をたび、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
びのそを思ひ、ハ、ハ、ハ、ハ、
まれたるハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
とやりてあ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
のハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
返ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、

の八幡より降て於已勢多流 ころりのちそ
八ちく、遊仙窟より遣オコ ちく、和訓禁より送ち
ひの義とゝひたれど、送越のことなべ
たゞ人 神代紀上より、稱生タグヒナル字鏡
イ部より、儕タグ太文比、仏旦石ちより多具霸利
云ゝ方四より、副而タグヒテちゝ、ちゝ、おかり
おりひやろよも、山家集上より、ちゝ上ちゝ
比べよりゆゝ、ちゝとハおりひ万ケ
紙ハあれろり、

る。
恋 しのぶくやちゝ副 なさ
夕に行 ちさてハらつる帰 ちちの遠
らちち。又おちゝたびれ題
にて。
初 かりそめのまれ枕のよるく 夜ハ
思 をおりひやるよも遣 神ゝ霧け
ちゝとあるふにちを又ちへ返 ちゝ事
ちゝ書 ちゝ添 ちゝ
秋ふちゝ草ゝまちにまれ 振
ぞちゝ拾 ふちちて来 ちゝ鈴 ちゝ

山のこゑ、

虫 むしのねを。又此五十首ハう
ちのおくに扶仏 ちゝにおとゝと出
ちゝ。大幹 おちゝ方おさまちゝ
ちゝ記 つけて。おくに為家 ちゝ者の人の
哥。

ちをこべいう斗かゝおりひ
つる人ようちちて代 ちゝ哭 ちゝ泣 ちゝ
ちる侍従 ちゝ。とちゝ為守 ちゝ。ちゝのおく
うちためりの君ハ世原仏 ちゝ。
世 首のうちを抱送 ちりて。こ
れにてんあひて。ちちちん悪 ちゝ

こゝ〳〵八十七ぞ〳〵、常樂記よ嘉暦三年十月八日曉月房逝去、終焉歌、けゝをあまりまこせのそれぞ九よにこゝろのそをとゝめてゆゝ九、これはゝれば、弘安元年八為守十四なり、諸本十六とあるハ誤なるべし、

をこまつ（巨細）ふもとの（記）ちゝ（給）ちゝべといふ
ゝりこゝ〳〵十七ぞかゝ。あけく
ちゝれば。やゝ（閑冶）く行ぞ申れも。
かへ〳〵ゝのやみ（闇）。ゝゝ（傷）ゝ（痛）
くゝん。これをたびのうゝにこふ（旅）
たゝをわひてゝゝゝりけゝゝ。
ゝゝ〳〵ゝぞのよつゝ（日記）をゝの人
人のゝゝへ（遣）ゝゝ〳〵ゝゝ〳〵を。
ゝゝれゝりけゝたゝり。
（為尋）
立ゝれふ（冨士）じ（烟）わけゝゝゝ
てゝをかゝんぼゝゝはいゝゝひ

んぶゝゝ、拾玉集三ゝとゝゝ九ゝゝゝ
ゝゝゝゝまにゝゝゝゝんぶゝゝゝゝとゝゝよみ

けん。ゝゝこれも返〳〵をうたつく。
（假初）
かりそめふ（ふ）ゝゝれてゝをゝを
ゝゝゝわひをゝの（為教女）ゝゝ（細）
〳〵ゝゝ権中納言は君こゝ
やゝゝ文ゝゝて。ゝゝり（歌）ゝゝひし
ゝゝ。ゝゝゝゝゝ友をゝゝて。秋よ
ゝゝていゝゝわひいゝゝゝゝゝ
ゝゝゝまに。ゝゝゝ月をゝゝゝ
ゝゝめゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
（剃付）
東海ゝゝゝゝゝ（記）
（念）
みだよゝゝゝ泪ゝくゝゝゝ月

志きしまの倭国　万十三よ、志貴島倭国者云々、此かいとおり、崇神紀よ、三年九月遷都於磯城、是謂瑞籬宮云々、古事記崇神の段に、師木水垣宮云々、垂仁の段よ、師木玉垣宮云々、欽明紀よ、元年七月遷都倭国磯城郡磯城島、仍號磯城島金刺宮云々、古事記欽明の段よ、師木島大宮云々、敏達紀よ、磯城島天皇時云々、舒明紀よ、磯城嶋宮御宇云々、

かげ。此は返りの方を左の方云々、さなどさて。

かよ通ふ　ぬれはかの月みてをこそたろかしさ知ぬ剛付

おがめハ。ぬの前ごもてれ後ち多ぬ積ふ有ふ。又ささつくべし。

しさ倭や　屋まとは国と天地ひめ清ちは岡ひらみ初し

ひ芽むらまも従岩戸をあけ神楽詞面白ぬ白ふ

孝徳紀よ、ここ、かく久し、紀都の地なれば、その国の柱河よりおかをていつる、万十九よ、之奇島能人者和礼自文とよめるハ、倭国と大倭国のすれひ、後こハ大八洲のすれもかよハいつる、我のろ、ろ、ろ、

抄ともあられ〜わたるとそ云〜、八雲抄
よりの説、玉叢よりの説といつるとハ、やう〜
ちくをみそれぞひがことといふ〜への云文ハ、まくハ〜の説
〜いへれ、四海〜又すべしもいと方の説とうみそ
たるぞうーそいされど後拾遺集序よりの説
雅五に、小説よりのうこの説とづらたるきみが代よりはしの今とそれ〜ん、たづもみえて中ぞろうしい
ひあ〜づるこゝろをれどうよりひけづ〜ぞ〜よりはしたる
えーすく風もやゆ〜くよ相もたゆ〜さべ、王充
論衡十七是憲篇よ風不鳴條、雨不破塊、
五日一風十日一雨云〜、西京雑記五よ太平之世
則風不鳴條、雨不破塊、倒葉
津莖而已云〜、塩鐵論八よ周公載紀而天下
太平、国無夭傷、歳無荒年、當此之時、雨不破
塊、風不鳴條、旬而一雨、雨必以夜、無五陵高下、
皆熟云〜、慈慧大師傳よ天朗氣清、風不鳴
條云〜、孚日行幸和歌序よ風ハ相とたゆ〜
さど、雨ハつちくれとやぶ〜べ、よの中さ
のりーくれバけのこの世ハあるまゝすこき、
千載集賀よ、栄徳院、やく風も本の相
とバあ〜さねど山ハ久〜しくこゝ色ぞたる
る、栄花月の宴よ、吹風も相とのゝ〜ぞ
云〜、清輔集に、きみが代よ相もたゆ〜さ
でやく風ハむ相のけちひまぞ〜しる浪

やゝかみ　和
ふるかめも　陣雨
きみ〜の　君
たゝぐひて　従
藻塩草
すかぐ〜
あ〜相わく　跡
それが中に　留
名をとめて
人はなか

相とたゆ〜さど　定
時さぐまれた　御言
みこのまに　隨
もろ相の海の　和歌
かゝあつめたる　集
それが中に　留
こ代までつぐ　従
親は　取別

相ゝろのたゝに、吹風も相とたゆ〜さど
云〜、さひのまゝの日記よ、やく風も相とたゆ
らさべ云〜、右京大夫集上よ、吹風と相
よのぐけ〜云〜、曾我物語二よ、やく〜ぞも
相とあ〜さど、みるあつたくれとうぐ〜さ
で云〜、爰云〜国師集よ、やく風の相とあ
らさめ生云〜、

君〜の、　莞爾彼集賀よ、かぶれとうろ
さ〜みぞ〜ぞ〜みたの、論語六よ、君君臣臣、父父、子子、云〜、
三代までつぐ〜、　後成、之家、号家、の三代とゝ云〜、

信濃、　和名抄五よ、東山国、信濃、国府在筑摩郡、行程上三十日、下十、管十、田三万九百八町八段百四十歩、正公各三
十五万束、本稲八千九百五十束、雑稲十九万五千束云〜、信濃風土記よ往昔建御名方神、葦之所住之地也、俗天下御神
大宮持命、又少彦名命、建御名方命、巡行此国、給列坐阿羅野、記此国者木葉草、垣葉品〜也、故云品野、今云
信濃者、言之轉也云〜、景行紀よ日本武尊、進入信濃、是國也山高谷幽、翠嶺萬里、人倚杖而難升、巖
嶮磴紆長、峯數千馬頓轡而不進云〜、古事記傳十四よ、科野国名、義ハ山国にて級坂あるあの名なり
ことゝ、ゆ〜〜一説よ、此国よハ倉科、徳科、御科、仁科、蓼科、など志那て人地名にはかゝ、科ハたいとゆ、梯
これなり、神楽歌よ、ゆ〜〜、本御造る科の系〜〜みえ、諏訪神社の紫束鎧のかゝ〜馬の餞、船の綱などゝも用よ、
紐れバ科野て人国名と此本より出たるなり、今も級布、紙布、藤布、多布布などと出〜、更級郡などハ殊
指と多く出〜て名考云〜、なお国造本紀、延喜主計式上、以呂波字類抄志部、拾芥抄中末、節用集国郡
部、大八州記、七列名紀原、人国記、国名風土記上、海道諸国記、諸国名義考、上などにみえ、
そのゝ〜ゝ〜のゝ〜に、　信濃風土記よ、曾原郷、出彼〜枳木、杉、松、菅等云〜、倚語抄下よ、或人云〜さ
本の杜のさ〜、その杜いとうけて、杜の中れく〜さ本の生たる〜、それと〜かくてみれバあるやうたそて、

ゆづりて　讓
そのまこと　實
はりたづ〜　群
はりへバいや　思　戦
信濃在
そはもの　帝
蘭原
そのまゝよ　種　蒔
たゝとまれたる

日蓮往画賛巻三所載
鶴岡八幡社頭之圖

社の下よりとりてみるよりのーげりてみるあり、それをとりてみるよりあるやうにてちらくてみれば、あるあり、云く、後拾遺抄中、袖中抄十九、続歌林良材上、東遊記後編三、色葉和難集一、色葉集下の三、本朝書籍名所図会三、信濃地名考中、西遊行業抄四の上、笈埃随筆九、などよこれれいて、古今六帖五、その外やふせ屋よりする帰本のもとにそのけどあり、めさみる処、此歌新古今恋一、坂上是則が云くーてこのあり、とかそそーあり、源氏帰本、ちくさ本のもとーらで、そのちくのあるやちくまどひあるうえ、信濃国志に、薗原山在小県郡、信列与濃列界、伊那郡亦有曾乃原云くー、古今著聞集和歌部、解脱上人のうくかそろーや伝後うみんちくさ本のそのちくさへようとまーれるみ、此ちもちくまよ母とれ、その歌、其歌とうせうり、

仕 世あをつらへよ
生 とがとてや
技助 あをさきけること
置 いける うの
須磨 明石 契 ちぎりおくー
在 つぐ紀ちれ
仮群イ古 川山の
仮群イ古 余 山がとり
僅 とづるよいのち

須磨、延喜兵部式、摂津国驛、須磨云、万葉三、須磨乃海人之云、此かたくうり、吾妻鏡四、播磨国、有瑠璃明石等之勝地云、摂津志十二、摂陽群談一の下、同五、ちどめ文田郡の歌、陸西遊行裏抄四の巻ちどめ、

明石、和名抄、播磨明石郡、明石安加之云、日事紀国造本紀、明石国造云、神功紀、詣播磨興山陵、於赤石云、元恭紀、赤石海底云、清寧紀、赤石郡云、顕宗紀、同孝徳紀、赤石搒渕云、続紀九、播磨明石賀古二郡云、續後紀十五、播磨国明石濱云、万三、留火之明大門云、此

くぶはあぐれるいと、師説、金光明最勝王経、捨身品に、大車王の第三子摩訶薩埵太子、大慈悲心を起し、身を大竹林の餓虎に投与、時其妃国太夫人悲傷のうを説る条に、爾時夫人迷闇猶止頭髪蓬乱、両手捶胸宛転于地、如美處陸若生失子悲泣而訴云、とみえたる、るよりれるかべーまくと、荘子外物篇に、有中道而呼者、周顧視車轍中有鮒魚焉、周問之曰、鮒魚来子何為者邪、鮒曰、我東海之波臣也、君豈有斗升之水而活我哉、周曰、諾、我且南遊吳越之王激西江之水而迎子、可乎、鮒魚忿然作色曰、吾得斗升之水然活耳、君乃言此、曾不如早索我於枯魚之肆矣、とみゆ、

懸樋 かけひとて
水上 みづうみも
今 いまはたで
唯 うの奥 いをはごと
如 舟 ふ孫のごと
ハて扶 記 もびもはる
果 夜 ふかはつ鶴
出 いでーかど
鎌倉 かまくーら
繁多 ちげーまび
聞 上 言端 ことはも
傳 つたひーー水の
垣留 せをとめーれて
陸上 くがにはが生る
揖緒絶 かぢをたえたる
寄方 無 よるるもなく
思 ものを思ひて
都 なくーこや古
不数 多ハかどあーは
政事 世のまりごと
上 聞 をそあげて
隠 ねまくーーて

べとさくやこの花
さくやこのはな、弘安三年なり

さくらのいろさはよろハ、さくらの枝の
ちりまひいろさまにうかちりめんとの
こと、さくらのこいひて物のすきを
りさくらよハ物といひ物沼なりー上
の巻よりくくなり、

あーー本のこと、和歌のこのうりにて、おさ
しものこもりよりおるーー神代紀上よ、
豊芦原瑞穂国とありて、此国のりゞも
芦の穂のかりーーゆゑの稱、

つーき、和訓栞よ、つれなしの墓、うた
ーーー

麻に似たるものゝ、古事記上よ、取二豆白丹寸手一云々、神代紀上よ、天日鞍鳥所作木綿云々、古語拾遺よ、穀木種植之以作白和幣云々、なるも因ねゝさて木綿のすハ豊後風土記、神道獨說古事記傳八方葉類林十三、万葉柏舟抄由の歌、和訓集由の歌、なるよりハ、穀木ハ東国にてカヅノキといひて紙にもくるものゝ、古今著聞集よりその皮にいつることれ、そでハ豆と同じ、皇極紀よ懸掛木綿云々、日本紀竟宴歌よ、奴佐波志豆気由云々、孝徳紀よ、豆此云之娜屢、古事記上よ、訓豆此云志殿云々、はかりのよりゝみえて、繁豆の義ゝ、シヅのシと者ミ、タレとつゞめしなるべし、

心掛向

かけてゝ

安

みぐりがはしき

麻跡無

あさハあれども、主のなりよりもとゝ

あさ麻の享をもつぐ云々、

たゝりあとゝ

忘

もとれどハ

又誰

まさたれゝ

直

引かゆとゞこ

不顧

多をゝうみど

頼

たのむぞよ

殘蓮

そはよと笑む

いさめ置

名歌原

ゆゝめるすを

も技群

ゆゝめるすを

都之中の清水、　古今雜上、ゆゝみ人をそ、いゝ一への宮中のほゝゆゝめけれどすゝのこを

ちゝくそくむ、六帖ゆゝもゝ、童紫抄三よ、何内国ニアリ、又ハリマノ国ニモ云々、袖中抄十よ、能因ゆゝ枕と引云、歌中の清水とハ、ゆゝめとゝよ、又和語抄を引云、河内のはまもゝ云、要伝抄下の中に、播磨国いゝゝのよゝゝ云々、顕昭要勘よも、播磨の稲見歌よゝゝ、又社国ゆゝ枕と引れゝゝ、能因ゆゝ枕の今ゝゝも、古今顕昭にも脱てゝゝ、八雲抄五よ、此ゝの清ゝゝ、播磨いゝゝ、此ゝよ、又河内に播磨ゝゝ云々、歌林良材下、美、色葉集下之二、色葉和難集六、歌林樸撥十四、美竹集一、春雨抄、歌林拾葉抄六、古今栄雅抄十二、餘材抄十七、和歌要累抄四、藻塩草十、陸西進行裏抄五、

託付

かこちてゝ

人のあさけも

情

此

ゝゝけり

同

ゆゝ枕

ゆゝ磨

ゆゝ枕

ゆゝ磨

ゆゝ枕

ゆゝ磨

名所古角抄播磨国分、増鏡文永のさ
ら山の条、ちぐさもみ、続万葉論古
今新聞の去岡翁説よハ、此年の後水ハ
いづこ〳〵とも不知、たゞいづこともあ
れ、すとハ世のたとえにて、石井板井のごとく出つゝ人
のよりるゝや、所不知れがるべゝず、あゝ人ハ播磨の下郡此よりといつて、又あ人ハ市谷神よりゝ
るゝ、ゆゝ集おいそのゝ水の名のゝまゝみて〳〵ゝ水ハ又もゝ〳〵、寒越法師の歌よ、むゝ〳〵みゝ〳〵つゝめの
水のゝすれ水行いまゝ〳〵よ行ゆひのゞ人又協川院るゝゝよいゝ〳〵人のゝのゝとゝゞよゝゝて清水と行ゝも
むすびつゝゝ、これ〳〵まゝ〳〵ゞ布ゐ井よいよ〳〵人の社よしゞゝ清水のゝ〳〵ゝべ〳〵、

永在 行 今日 述 古 侯 語

鶴ゞ岡、諸社根元記よ伊豆國鶴岡八幡後三条院延久年中義家御勧請也、兼延奉行之云〻、二十二社註式よ伊
豆國鶴岡八幡宮、第七十一代後三条院延久年中源義家勧請也、兼延奉之云〻、伊豆ハ相模の誤也、五妻鏡
一よ、後冷泉院御宇、伊与守源朝臣頼義奉勅宣、征伐安倍貞任之時、有丹祈之旨、康平六年秋八月、僧
観請石清水、建瑞籬於當国由比郷、永保元年二月陸奥守同朝臣義家如修復、今又奉遷小林郷云〻、詞林采要抄五よ、披見地理全書、此所風水山嶺ノ様ヲ案スルニ、今ノ鶴岡ハ天倉ト云山也云〻、去治
承九年三右兼帯下鶴岡奉遷宮八幡宮云〻、祈鶴岡松岡八幡大菩薩奉観請玉フ〻、此又不思議也云〻、東
海道名所記一、鎌倉志一、源平盛衰記廿三、二葉集前編、鎌倉紀行、海鏡、藤田彦三、神社啓蒙、大本朝神社考
一、諸國一宮巡覧記五、国華万葉記八、和漢三才圖會六十七、諸社一覧六、神社考詳節、宴曲集四海道下、東
野州聞書、云廣日記、東国紀行、東国紀行、廻国雑記、海道記、東路之露、ちぐさ、新拾遺賀よ、墓氏、
鶴ゞ岡本ゝ記ゝ、ちぐさ、の中ゝよ〳〵ゝ系代のまゝ、ゝ家集よ、こゝ行ゝ〳〵ゝ鶴のゝ、ゝべの抄の注、武代
ゝ、ちゝを行ゝ久〳〵兵、夫木抄雑三、秋花名字世、ちぐ〳〵よ、とゝ〳〵ゝ、夫本抄雑十三よ、秘撰、君
ゞ代ハ、ゝゝ、ゝ、ゝ、

為奉行ちく、平治物語下よ、れれ平家とセー、天下と侍そ、文治の始法ふよ護と侍て、あ〜ゆ不の元国郷
保よ地頭と補して云く、續古事談二よ、或人曰、法ふの地頭〜〜人名仁ゆ、いよ〜ゆ〜ん〜と地
ゆひ〜ゆ、或本まの中よ元世よ戒よ諫るのの出来るとう侍し、卒尤元とあつゆ付、元頼
米のあよ国〜郡〜とやあつめちゆと地頭の義よ申へ、此文とみる人
の付初ちゆ、又里俗ちゆの童謡して云ゆ〜ゆ、不思議のよ、増補新撰ゆ〜ゆ、新勅法ふのそ〜つあ
ふ〜〜〜〜ふ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

為家ハ藤原氏系圖十一ニ、為家、權中納言
正二位、為ニ大相國公經公子ニ母、内大臣實宗
女、建治元年五月朔日卒、七十九歲、法名融覺
云々、

為氏ハ藤原氏系圖十一ニ、為氏、御子左侍
從大納言正二位母、宇津宮頼綱女、弘安元
年九月十四日卒、六十五歲、法名覺阿云々、

以上八字群、古、
本、他ナシ、

三字、古、他ナシ、

し。」

永仁六年三月一日書ス

阿佛房

此あづまのつぼねの人ハ。定家の
古本、ツノ
ヨリ四字有、
身ゐ家ハ宮たり。さ
んぬるち五人まいり。古、他おハ
光
ありまの國ちそ門の。庄
とゐ家ちりもづりれ。古、他
れ、と。ゐ氏。他腰群、古、共たよ
ヲニ字有、
神領
りて。ゐ。やうれ。古、他ヤ
訴
れ。そ。

訟

ようためよ。かまくく古、安佛房、三字
有、
くぶれい古、他時の。古、元
ちぐんにらびし。古、他行
この業十二字有、
陳
ゐ氏もちんぢやうのくめよ。この狀
まくく下ゐ。ゐ人ちよりかまく
らにて死をせれし。訴訟
ハゐ氏のくへハ法けれどい
不被付
ちぐ。群、作
や、あづつハ安家門院ハ
四条ち中人ちり。ゐ相れく
ちり」

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

ぶとかまてとわまとうの栄命のうつ里
たるふひとらあるゝ所まゆたるひやうう
を陽今毎まうよ新しまゆまつるまゆる
たとたよかるゝしたるはゝうふまやたそ
う勢行うう程ゆるとやうそれうの程ゆこ
程なうふいとうとれううさにうう
をゆたゝしたゝたるゝしさたをうと
うゆこみうるのおうまゆとゝゆ

ゆの程ゆ程ゆ毎ゆうの程ゆ程ゆ
ゆ程ゆ程ゆ程ゆ程ゆ程ゆ程ゆ程ゆ
の伊勢ゆ毎ゆ毎ゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
の程ゆ程ゆ毎ゆ程ゆ程ゆ程ゆ程ゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

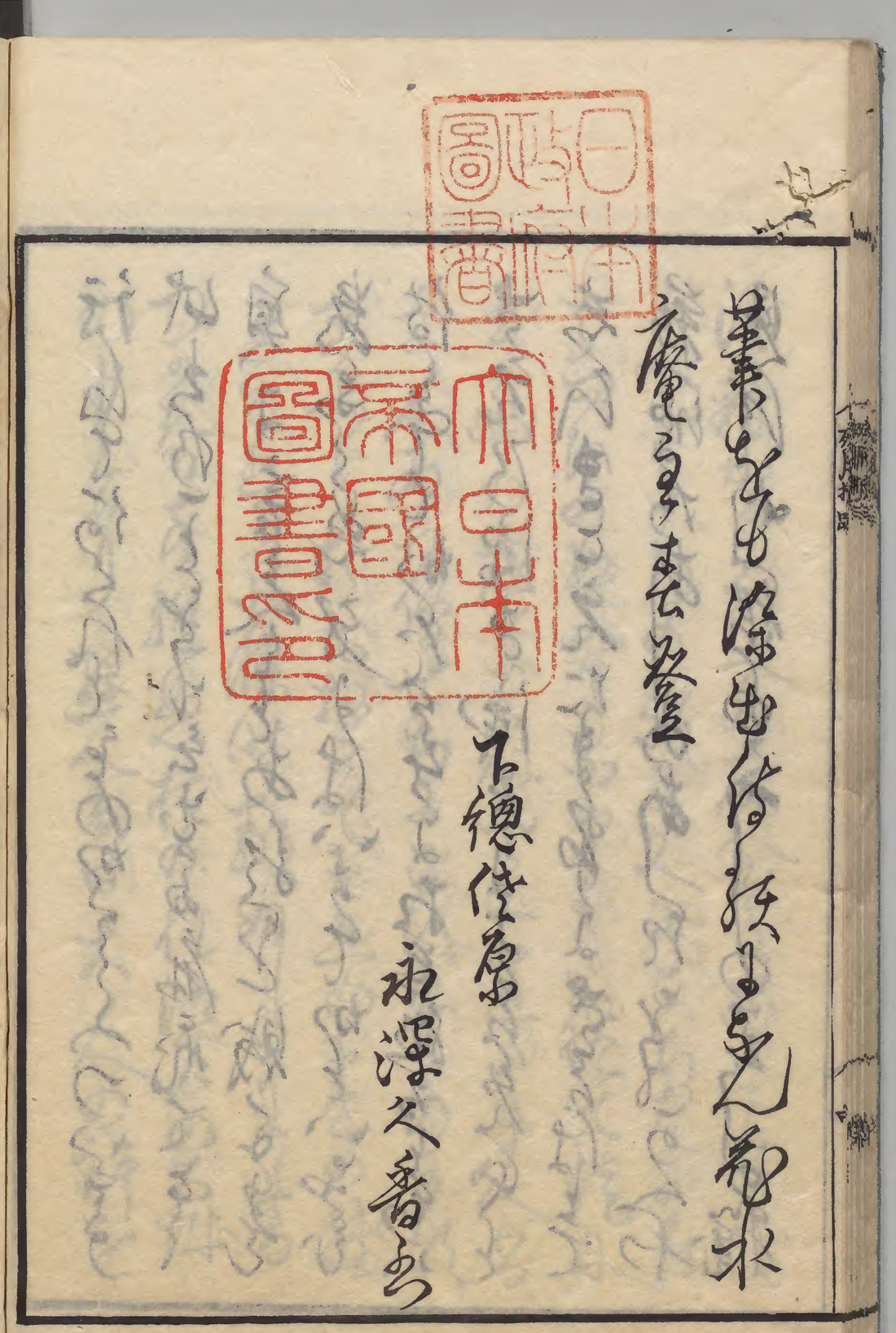
[illegible]

北林禅尼いまし建治の比より昨日
移殘出家とゝ吾書よりの給
そゝはもゝ百もゝ
れわすゝ[illegible]
十七歳の日記と先つけてかゝの
給へきゝを拾ゝ高乃大人
さゝくよわあゝ[illegible]
たまへるつゝ[illegible]
ゝとあるゝ心ゝ[illegible]

注報かきそへ人の麻へるよりてこの紙
しへるこちの弥よりよりとちたこの新
きつかいのぬふこのやまき殺て流水
ものの底よりこのくやる星てます人る
ます人あわ信せちよりとしてのこの
ますく おもはのてきをのやきの緒
きるをきそ小藤は新ぬりよ書
つのをの左殺ぬ枕のれ江戸の左体
の中とり 陸へる日大人の伴を

行ひて行くれとものかきへついきる
はもあるとともはいを麻形てを
奥 よ三左をへをあ殺をを賊をまを
あふくぬ分はいてかといもむ
信をしかたをれを殺るをちは
きえ乃深き御きよを殺やと
をいきこえたまあよさをはとて
殺深あのあれををの人和
見信の報のうりの左をの藤

帝国図書館



下總佐倉
永澤久香

残月抄 一二之巻 松屋高田大人之注釋
同三之巻 北條時鄰子之續筆也

文政七年二月

書林

江戸日本橋新右衛門町 前川六左衛門
同 浅草南馬道町 業村半藏
同 日本橋四日市 松本平助
京都 三條通高倉東入ル町 出雲寺文次郎

国立公文書館
National Archives of Japan